



Title	感謝表現「ありがとう」における助詞ヲの有無：書き言葉コーパスを用いた共時的・通時的分析
Author(s)	藤平, 愛美
Citation	日本語・日本文化. 2017, 44, p. 53-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60420
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

感謝表現「ありがとう」における助詞ヲの有無 —書き言葉コーパスを用いた共時的・通時的分析—

藤平 愛美

1. はじめに

1.1. 問題の所在

感謝の意を表す「ありがとう」は私たちが毎日のように接するごくありふれた定型表現の一つである。その「ありがとう」は、感謝対象¹⁾を名詞句で表す場合、以下の二通りの文法形式を用いることができる。

(1) (メールで)

- a. 早速の返信ヲありがとうございます。
- b. 早速の返信 Ø ありがとうございます。²⁾

(1a) は助詞ヲを伴って表したものであり、一方 (1b) は助詞ヲを伴わずに表したものである。それでは、この二通りの形式の間に意味・文法上の違いはあるのだろうか。もしあるとすれば、その違いはどのようなものなのだろうか。本稿ではこの問題について考察することを目的とする。

このような二通りの形式を前にし、誰もが思いつくのは (1a) のような助詞ヲを伴う文から助詞ヲが省略されて (1b) のような文が生じるのではないかということであろう。しかし、(1a) のような助詞ヲを伴う文 (以下、助詞ヲ附加形式と呼ぶ) と (1b) のような助詞ヲを伴わない文 (以下、無助詞形式と呼ぶ) は、必ずしも助詞の省略と解されるほど同じ意味を表しているわけではない。たとえば、(2a) のような例文を耳にすることがあるが、それを無助詞形式で表した (2b) は許容度が落ちるように思われる。

(2) (高校野球の閉会式にて)

- a. 感動ヲありがとう。
- b. 感動 Ø ありがとう。

また一方で、無助詞形式である (3a) のような文を聞いても特別な意味を感じない電話応対の決まり文句であると受け取られるであろうが、助詞ヲを伴った (3b) のような文を聞くと何か特殊な背景や特別な意味が込められているように感じる。

(3) (電話が鳴り、受話器を取ってすぐに)

- a. お電話 Ø ありがとうございます。ABC 社お客様係でございます。
- b. お電話ヲありがとうございます。ABC 社お客様係でございます。

通常の間ゆる「助詞の省略」において、助詞の有無によってこのような許容度に差が表れるのはまれであることから、助詞ヲ附加形式と無助詞形式の間には何らかの意味・文法上の違いがあると考えたほうがいように思われる。

さらに、通常間ゆる「助詞の省略」と呼ばれる現象は書き言葉では起こりにくいとされているが、この「ありがとう」の場合、(1a) のようなメールの文面や、(4) のような書き言葉においても無助詞形式が現れており、この点からも通常の省略の性質とは異なる現象であると言えよう。(4) は無助詞形式の「ありがとう」が小説の中の手紙文で使用されている例である。

(4) … (略) …写真有難うございました。飼い主—それだけであつた。³⁾

(森村誠一『黒い神座』)

以上のように、感謝表現「ありがとう」における助詞ヲ附加形式と無助詞形式には何らかの違いがあるように思われる。そのため、本稿ではコーパスを用いた調査を基に、その違いがどのような性質のものであるかについて論じたい。

1.2. 先行研究

この助詞ヲ附加形式と無助詞形式の意味上の差異という問題の検討には、二つの方向から研究を進めることが可能である。一つは「ありがとう」を含む挨拶表現からの研究、もう一つは無助詞形式や助詞の省略からの研究である。

このうち前者、すなわち挨拶表現に関するこれまでの研究は、社会言語学や語用論・意味論の観点からのものが中心であり、本稿のように挨拶表現の文構造を問題にするような研究は見られない。したがって、この方面からの研究を本稿の研究結果に活用することは難しいだろう。

その一方で、後者、すなわち「無助詞」や「助詞の省略」と呼ばれてきた助詞を伴わない形式に関しては、尾上(1987)をはじめ、丹羽(1989)、長谷川(1993)、加藤(1997, 2003)、Fujii & Ono(2000)等、多くの先行研究で論じられている。その先行研究の中には、助詞が現れないことに対して大きく二つの対立する解釈がある。一つは助詞を伴わない形式を「助詞の省略(脱落)」と捉えるものであり、もう一方は助詞を伴わない形式を「無助詞」や「ゼロ助詞」と名付け、それらが特定の機能を有すると捉えるものである。

まず、「助詞の省略(脱落)」とする立場である久野(1973)は「主文の主語をマークする『ガ』は、会話文でも省略することができない。主文に助詞を伴わないで現れる主語は、全て『ハ』の省略の例である (p.223)」としている。久野(1973)では主に助詞ハとガについて論じられているため、本稿で研究対象としている助詞ヲが省略できるか否かについては明確に論じられていない。しかし、久野(1973)は、「名詞句+ハ」は「名詞句+助詞」が「主題化」という操作を受けた結果、助詞ハでマークされ文頭に移動してできたものだと考えている。「助詞の省略」と考える立場の中でも、ヲ格名詞句に助詞ハでマークし直されたのちに省略されたと捉えるのか、あるいは助詞ヲが直接省略されたと捉えるのか、という省略のプロセスの解釈は一致していないようである。しかし、どちらの解釈を取るにせよ、この「助詞の省略」という立場で本稿の(1)のような文を解釈しようとすると、無助詞名詞句は本来あるべき助詞ヲが(直接的もしくは間接的に)省略されてできたものだと捉えることになるであろう。本稿で調査対象としている(1b)のような文を助詞ハで復元しようとして「早速の返信ハありがとうございます

ます」とした場合、元の文の意味とは異なる対比的な意味を帯びてしまう⁴⁾。また、(2)(3) で見たように、助詞ヲで「復元」することのできない用例も見られるため、本稿で調査対象とする(1)のような文の場合、助詞ヲを伴う形式から助詞ヲを省略したものだと考えるのは難しいように思われる。

一方、音形を持たない助詞が存在する、もしくは助詞が現れないことによって積極的に別の機能を持つようになるという立場がある。そのうちの一つが加藤(1997, 2003)であり、加藤(1997)では「《単なる助詞の省略》と《ある種の機能を積極的に果たすゼロ助詞》を区別しないという立場 (p.23)」を取ると述べている。その後、加藤(2003)では、その「ある種の機能」について、「《ゼロ助詞》がついている名詞(句)に焦点が当たる情報構造としての解釈を退けることである。…(中略)…これを、本書では《ゼロ助詞》が《脱焦点化機能》を有していると言う (pp.383-384)」と述べ、助詞が伴わない形式の機能を焦点という観点から論じている。また、助詞が表出するか否かによって意味の差が表れるのかという点については「発話状況や発話意図など語用論的な条件に左右される (p.383)」としている。また、加藤(2003)では助詞ヲを対格と場所格と状況補語の三つに分類し、そのうち対格と場所格のヲについて、無助詞のほうが自然な例と、助詞が現れたほうが自然な例と、無助詞でも助詞表出でも可能な例を検証している。ヲ格の省略に関して対格と場所格の両方を検証しているが、省略できるか否かという点に関して、その格の機能による差は見られないと指摘している。そのため、本稿においても対格と場所格は区別しないが、そもそも「ありがとう」の感謝対象を表す名詞句が場所を表す名詞句であることは非常にまれであるため、この点は本稿の論旨にほとんど影響しない。また、状況補語とは(5)のようなヲ格名詞句のことを指すが、これらは本稿の調査対象とはしない。

(5) 嵐の中を飛行機は離陸した。(加藤 2003:351)

本稿で実施する調査に関しては、「2. 調査方法」で詳しく述べる。

さらに、省略説と別機能説の折衷説を取る立場もあり、その先駆的研究である丹羽(1989)では、省略された元の助詞を「復元」することが可能なものについ

ては「文体的な価値は別にして、特に何かの機能を持つとは考えられず、単なる格助詞の省略と考えると差し支えない (p.41)」としながらも、助詞ハでもヲでも「復元」することができないものについては『〇』は『は』の省略だとは考えず、『〇』自体が主題表示の機能を持つと考えた方がよい (p.39)」としている。つまり、助詞の復元が可能であるものは本来存在している助詞が「省略」されたものであり、一方助詞の復元が不可能な場合は主題を表す「無助詞」だと捉えていることがわかる。また、主題性と語順に関して『名詞 〇』は、文頭に近い位置にあるほど主題性が高く、文中深い位置にあるほど主題性が低い (p.41)」としている。

このように、先行研究においても助詞を伴わない現象に対する解釈は一致しておらず、「助詞の省略」と考えるべきか否かは線引きが難しいことが分かる。本稿では、基本的に丹羽(1989)の立場を穏当なものとするが、それを本研究へ直接適用することはできない。丹羽(1989)の考え方では助詞ヲで「復元」できるものについては「省略」であるという可能性を残すのであるが、「ありがとう」の場合、助詞ヲで「復元」できるものとできないものが混在しているからである。したがって、無助詞形式が「省略」なのか「主題」という独自機能なのかという点は、なお検討が必要な課題なのである。

1.3. 研究の目的

「1.1. 問題の所在」で見たように、感謝表現「ありがとう」の助詞ヲ附加形式と無助詞形式の間には何らかの意味・文法上の違いがあると考えべきであり、これまでの無助詞研究に照らし合わせれば、その違いは「ありがとう」の無助詞形式が助詞ヲの省略と解されるべきなのか、それとも主題を表す音形を持たない助詞、すなわち無助詞があると解されるべきなのかという問いにつながるであろう。本稿では書き言葉コーパスを使用し、通時的・共時的観点からその問いを明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

前節に示した問題を検討するための用例を、本稿では『現代日本語書き言葉均

『平衡コーパス』(BCCWJ-NT)を使用し、収集した。先行研究において、助詞を伴わない形式が話し言葉で出現しやすいことが指摘されているため、本稿が書き言葉コーパスを使用することは問題があるように感じられるかもしれない。しかし、後述するように書き言葉でも十分な数の助詞を伴わない形式の用例が認められる上、この問題の検討には歴史的な側面も考察する必要があるため、書き言葉コーパスを使用するのが妥当であると判断した。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は1970年代から2000年代のデータが収められているが、現在公開されている話し言葉コーパスにはそのような年代的に広範囲なデータが存在しないからである。

次に、調査方法について述べる。コーパスの検索条件は(6)のように設定した。

(6) 検索条件

- a. キー：語彙素読み「アリガトウ」
- b. 前方共起条件3語以内：語彙素読み「ヲ」
- c. 前方共起条件3語以内：品詞「名詞」

「ありがとう」の全用例を調べるために、(6a)の検索条件を使用した。検索のキーを語彙素読み「アリガトウ」に設定することにより、「ありがとう」「あんがと」等の出現形の異なる用例も検索にかかるようにした⁵⁾。助詞ヲ附加形式である「Nヲありがとう」の調査には(6a)と(6b)を組み合わせ、無助詞形式である「N〇ありがとう」の調査には(6a)と(6c)を組み合わせで検索を行った。前方共起条件を3語以内に設定したのは、感謝対象を表す名詞句と「ありがとう」が離れた位置に生起している用例も検索にかかるようにするためである。もし前方共起条件を1語に設定した場合、名詞句や助詞ヲが「ありがとう」の直前に生起している用例のみが検索にかかり、(7)のように名詞句と「ありがとう」の間に副詞句や記号が入っているものが検索にかからないのである⁶⁾。その一方で、前方共起条件を3語以内に設定することによって、(8)のような対象外の用例もかかるため、それらは手作業で取り除いた⁷⁾。(6a)(6b)の組み合わせで検索にかかる助詞ヲの部分に波線で、(6a)(6c)の組み合わせで検索にかかる名詞

句の部分を下線で示す。

- (7) a. 電話どうもありがとう。
b. 電話、ありがとう。
- (8) a. 「応援や声援ありがとう」(名詞句の重複)
b. 「メールをいただき、ありがとう」(複文)
c. 「みなさん、ありがとう」(呼びかけ)
d. 「長時間、ありがとう」(時間句)
e. 「寒空の中をありがとう」(場面・状況句)⁸⁾

以上の方法で行った調査の結果を次章に示す。

3. 調査結果

ここでは、前章で示した調査方法を用いて集めた用例を共時的・通時的という二つの側面から分析する。共時的とは言うものの、コーパスの中からある特定の年代を取り出すのではなく、コーパスに収められている1970年代から2000年代を一時代として包括的に見ていく。

3.1. 共時的傾向

まずは、「ありがとう」と助詞ワの表出の有無の関係を共時的に見ていく。表1は「ありがとう」の文構造を「単体使用」「名詞句+ありがとう」「従属節+ありがとう」の三つに分類し、その用例数と割合を示したものである⁹⁾。

表 1. 「ありがとう」の文構造

文構造	用例数	割合
単体使用	5872	73.4%
N {ヲ/Ø} ありがとう	1015	12.7%
従属節+ありがとう	1114	13.9%
合計	8001	100.0%

「ありがとう」の全用例数は8001件であった。そのうち、「ありがとう」が感謝対象を表す名詞句や従属節を伴わずに単体で使用される用例は5872件あり、その割合は73.4%であった¹⁰⁾。このことから、「ありがとう」は単体で用いられることが多いことがわかる。「ありがとう」は現代語では品詞分類上、感動詞とされることが多いが、単体での使用が多いことは、「感動詞」という品詞の特性からも当然の結果と言えらる。

また、「ありがとう」の全用例8001件のうち、「ありがとう」の感謝対象を名詞句で表すのは1015件、割合で言うと12.7%しか占めていないことがわかる。このことから、「ありがとう」の感謝対象を名詞句で表すことは珍しいと言える。

次に、感謝対象を表す名詞句が助詞ヲを伴う傾向についても見てみたい。表2は感謝対象を名詞句で表す用例の中で、助詞ヲの有無の用例数と割合を示したものである。

表 2. 感謝対象名詞句の助詞ヲの有無

助詞ヲの有無	用例数	割合
助詞ヲ附加形式 (Nヲありがとう)	195	19.2%
無助詞形式 (NØありがとう)	820	80.8%
合計 (N {Ø/ヲ} ありがとう)	1015	100.0%

表2が示すように、名詞句を用いて感謝対象を表す1015件のうち、助詞ヲ附加形式は195件、無助詞形式は820件であった。それぞれの割合は、助詞ヲ附加形式が19.2%であり、無助詞形式が80.8%である。この結果より、感謝対象を

名詞句で表す場合、無助詞形式のほうが一般的に使用されていると言える。この言語的事実は無助詞形式の性質について一つの示唆を与えてくれるように思われる。無助詞形式が助詞ヲ附加形式から助詞ヲを省略してできたものだとしたら、このような圧倒的な用例数の差が生じないと思われるからである。この点から、感謝表現「ありがとう」の無助詞形式は、助詞ヲ附加形式から助詞ヲが省略されてきたものではないことが支持されていると考えられるのである。

3.2. 通時的傾向

次に、「ありがとう」の感謝対象を名詞句で表す傾向を年代ごとに見ていく。表3は、「ありがとう」と「N {Ø/ヲ} ありがとう」の用例を年代別に展開したものである。また、年代ごとに、「ありがとう」の用例数のうち、感謝対象名詞句が用いられる割合を調査した。

表3. 感謝対象を表す名詞句の年代別の傾向

年代	ありがとう	N {Ø/ヲ} ありがとう	
	用例数	用例数	年代ごとの割合
1970-1979年	68	2	2.9%
1980-1989年	410	18	4.4%
1990-1999年	1208	58	4.8%
2000-2009年	6315	937	14.8%
合計	8001	1015	12.7%

1970年代から1990年代まで、感謝対象を名詞句で表すのは、「ありがとう」全用例のうち5%未満にとどまっている。しかし、名詞句を用いる形式は2000年以降に急増し、15%近くまで占めるようになった。3.1節では、感謝対象を名詞句で表すことがあまり高頻度で使用されていないことを明らかにしたが、それに加えてその傾向が新しいものであることも指摘できるのである。

さらに詳しく、助詞ヲの有無が年代ごとにどのように変化してきたかを以下に示す。表4は助詞ヲ附加形式と無助詞形式の年代ごとの用例数と、感謝対象名詞

句の用例数のうち助詞ヲの有無それぞれが占める割合を年代ごとに示したものである。

表 4. 助詞ヲの有無と各年代の傾向

年代	N {Ø / ヲ} ありがとう	助詞ヲ附加形式		無助詞形式	
	用例数	用例数	割合	用例数	割合
1970-1979年	2	0	0.0%	2	100.0%
1980-1989年	18	6	33.3%	12	66.7%
1990-1999年	58	15	25.9%	43	74.1%
2000-2009年	937	174	18.6%	763	81.4%
合計	1015	195	19.2%	820	80.8%

まず表 4 から読み取れることは、無助詞形式のほうが早く出現していることである。さらに、どの年代においても無助詞形式のほうが助詞ヲ附加形式よりも優勢であることもわかる。

3.3. 調査結果のまとめ

これまでの書き言葉コーパスを用いた調査によって明らかになった点を (9) にまとめる。

- (9) a. 「ありがとう」は単体での使用が多く、感謝対象を名詞句で表す用例は比較的少ない。
- b. 感謝対象を名詞句で表す場合、無助詞形式のほうが助詞ヲ附加形式より圧倒的に多い。
- c. 感謝対象を名詞句で表す傾向は、2000 年代になってから急増する比較的新しい傾向である。
- d. どの年代を通して無助詞形式のほうが助詞ヲ附加形式より多く、またその初出も無助詞形式のほうが早い。

もし無助詞形式が助詞ヲ附加形式の助詞の省略であると考えれば、無助詞形式のほうが先行して現れること、またどの年代においても無助詞形式が優勢であることは奇妙な現象である。これらのことより、無助詞形式が助詞ヲ附加形式から助詞ヲを省略してできたものだとはいえられない。無助詞は主題を表す形式であると、丹羽(1989: 39)でも述べられている。その無助詞形式を格関係的なものへと再解釈しようとした結果、助詞ヲ附加形式が新たに出現するようになったのだと解釈するべきではないだろうか。つまり、書き言葉では格関係を明確に提示しようという意識が働き、無助詞形式を格関係という枠組みに再解釈しようとした結果、助詞ヲが使用されるようになったのではないかと考えられる。このときに助詞ハが選択されなかった理由については、黒崎(2003)で述べられている通り、助詞ハを使用すると対比的な意味を帯びてしまうからであろう。そのほかに、助詞ヲが選択された積極的な理由に関しては、次章の考察で詳しく述べる。

4. 考察

前章までに「ありがとう」の無助詞形式は単純に助詞ヲの省略だとは言えないということを確認した。この解釈が誤っていなければ、統語的な関係においても無助詞形式と助詞ヲ附加形式では異なるはずであろう。丹羽(1989)においても復元できないものは省略ではなく主題を表すとされていた。さらに、(2)(3)で見たように、感謝表現「ありがとう」の場合、無助詞形式を助詞ヲ附加形式に「復元」させることはできない場合があり、また共時的に見ても通時的に見ても省略だとは考えにくいことを示した。したがって、「ありがとう」の無助詞名詞句は主題を表すものであると考えられる。

感謝表現「ありがとう」に対して主題を表す無助詞名詞句は独立性が高い。表1で示したように、「ありがとう」は単体での使用が多いことから、その独立性の高さを示していると言えるだろう。日本語では、格関係を表す要素や副詞的な要素等、述語にかかる多くの成分の主題化が可能である。それは逆に主題句が格成分や副詞的成分に再解釈される契機を有する。これまでの無助詞研究においても「復元」という方法で元来そこに附加していたはずの助詞を明らかにしようとしていた。同様のことが本稿で議論している「ありがとう」の助詞ヲの附加に

起こったと考えられる。つまり、本来独立性の高い主題句と「ありがとう」の関係が、主題句が「ありがとう」に対して従属的なものへと再解釈されたのだと考える。そしてここで言う従属的という在り方が助詞ヲによって示される対象を表す関係なのである。このとき、助詞ヲによって対象を表すというこの関係は、ごくありふれたヲ格の関係であり、換言すれば動詞文の有する関係であると見なせるのである。つまり、助詞ヲ附加形式の「ありがとう」文は、助詞ヲの特性から言っても動詞文的であると言えるであろう。

「ありがとう」のような挨拶表現が動詞性を持つということを不審に思われるかもしれないが、それはあくまで意味上のことである。品詞的には動詞でないものが意味的に動詞的な性質を持つということは起こり得ることである。たとえば、

- (10) a. 首相、台湾の援助を感謝。
 b. 一連の騒動を謝罪、問題の終結をはかった。

のように名詞がヲ格を標示する例を挙げることができる。これを、「感謝」「謝罪」が意味的に動詞性を負っているために可能な現象と考えることは、決して非合理的な解釈とは言えないであろう。「ありがとう」もまた、このような意味での動詞性を有すると考えるのが妥当なのではないかと思われる。もっとも、「感謝」「謝罪」はそれぞれ「感謝する」「謝罪する」のようにサ変動詞になることができるのだから動詞性を有するのは当然だとも思われるかもしれない。しかしそういうことであれば「ありがとう」もまた、

- (11) (祖母から飴をもらった子どもに対して)
 A 子ちゃん、おばあさまにありがとうしなさい。

のように、幼児語という限定はあるものの、サ変動詞化することができるのであり、「感謝」「謝罪」と決定的に性質を異にするものではない。むしろ(11)のような表現が許容されるという事実は、挨拶表現が意味の面で潜在的に持つ動詞性

が、現象面に端的に表出したものと解釈されるのである。

そして、このような動詞的性質は格支配にだけ認められるのではない。動詞性というのはテンスという概念とも結びつくものであるが、「ありがとう」もまたテンス形式を有するのである。

表5は、助詞ヲの有無と文末形式との関連を示したものである。ここでは、「ありがとう」の文末形式を「ありがとう。」「ありがとうございます。」「ありがとうございました。」「その他」の四つに分類したが、注目すべきはテンス面に対立する「ありがとうございます。」「ありがとうございました。」である¹¹⁾。

表5. 「ありがとう」の文末テンス形式と助詞ヲの有無

文末形式	助詞ヲ附加形式		無助詞形式		N以外	
	用例数	割合	用例数	割合	用例数	割合
ありがとう。	91	46.7%	151	18.4%	3360	48.1%
ありがとうございます。	33	16.9%	290	35.4%	1646	23.6%
ありがとうございました。	69	35.4%	374	45.6%	1937	27.7%
その他	2	1.0%	5	0.6%	43	0.6%
合計	195	100.0%	820	100.0%	6986	100.0%

まずは「無助詞形式」について見ていく。無助詞形式の場合、文末のテンス形式の使用に大きな違いは見られない。「N Ø ありがとうございます。」が290件、「N Ø ありがとうございました。」が374件であり、無助詞形式の用例820件の中で、それぞれ35.4%と45.6%となっている。つまり、無助詞形式の場合、文末のテンス形式の使用にあまり大きな差はないと言えるのである。

一方、助詞ヲ附加形式の場合は、「N ヲ ありがとうございます。」が33件、「N ヲ ありがとうございました。」が69件であり、それぞれ助詞ヲを伴う用例195件のうち、16.9%と35.4%となっている。つまり、助詞ヲを伴う場合、過去テンスを有する「ありがとうございました。」のほうが2倍以上も多いという結果になっている。

ただし、この結果のみから、助詞ヲ附加形式の場合には過去テンス形式と結び

つきやすいという結論を導くことは早計であろう。逆に、無助詞形式のほうが非過去テンスを取りやすいということかもしれないからである。この点を明確にするためには、感謝対象名詞句を伴わない例と比較しなければならない。名詞句を伴わない6986件について調査してみると、「ありがとうございます」が1646件、「ありがとうございました」が1937件であり、それぞれ23.6%と27.7%を占めている。感謝対象名詞句を用いない「ありがとう」において、文末のテンス形式における差は無助詞形式の場合よりもさらに小さくなっているのである。そうすると、過去テンスを有する「ありがとうございました」と結びつきやすい傾向は、助詞ヲ附加形式にのみ見られる独特な傾向であると言えるであろう。このような傾向から見ても、助詞ヲ附加形式が動詞性を有すること、ひいては無助詞形式と助詞ヲ附加形式が異質なものと結論付けられる。つまり、助詞ヲ附加形式は動詞性を有しているため、感謝対象名詞句をヲ格支配しているという点において、主題を表す無助詞形式とは異なるのである。

しかしながら、「ありがとう」の無助詞形式も原則的には主題を表すと認められるのだとしても、その中に助詞ヲの省略が混在しているのではないか、という疑いは依然として残るだろう。それについては明確に言うことができないと認めざるを得ない。しかし、丹羽(1989)において、『名詞Ø』は、文頭に近い位置にあるほど主題性が高く、文中深い位置にあるほど主題性が低い(p.41)」としている。(12)のように、文中の深い位置に感謝対象の名詞句を生起させてみる。

- (12) a. 本日はお忙しい中、私どものために、大変実りあるご講演をありがとうございました。
 b. 本日はお忙しい中、私どものために、大変実りあるご講演Øありがとうございました。

(12a)のように助詞ヲを伴うほうが自然であり、これを(12b)のように無助詞形式にすると、わずかではあるが許容度が落ちるように思われる。特に無助詞の場合「ありがとう」の前にポーズを置くと主題性が増して主題として容認しやすくなるため、ポーズを置かずに読んでいただきたい。このように文中深くに埋め

込むことによって名詞句の主題性を下げると、無助詞形式で言いにくくなることから、やはり「ありがとう」の無助詞名詞句はすべて主題を表すと考えるのがよいだろう。

このように考えると、(2) で見た「感動ヲありがとう」が無助詞にできないことも整合的に説明できるのである。

(2) (=再掲) (高校野球の閉会式にて)

- a. 感動ヲありがとう。
- b. 感動 Ø ありがとう。

丹羽(1989)においても、『『名詞 Ø』の主題性が低い場合は、格関係が明確でなければならぬ (p.49)』という無助詞の制約があると述べられている。例えば、いきなり会話の冒頭で「感動は…」から話し始めることは難しいことから、(2) の名詞句は主題性が低いと言える。つまり、(2) の「感動」は主題性が低いために、無助詞形式で表すことができず、助詞ヲ附加形式でのみ、すなわち助詞ヲを標示することによってのみ使用可能となるのである。

5. 結論

本稿では、感謝表現「ありがとう」が感謝対象を表す二つの形式、すなわち助詞ヲ附加形式と無助詞形式をめぐって、その意味・文法上の性質の違いについて考察した。その結果、感謝対象を名詞句で表すことが珍しく、かつ新しい傾向であることを見た。さらに感謝対象を表す名詞句の助詞ヲの有無に関しては、無助詞で表されるのが一般的であるが、助詞ヲを伴う例も約2割存在することを観察した。また、歴史的な変化として無助詞形式が助詞ヲ附加形式に先行して見られること、またいずれの年代においても無助詞形式のほうが優勢であることを観察した。以上の事実から、無助詞形式は助詞ヲの省略ではなく、それぞれが異なる意味・機能を持つものであるという結論が導かれた。具体的には、無助詞形式は主題を提示するものであり、一方助詞ヲ附加形式は格関係へ再解釈された結果、助詞ヲが現れるようになったと解釈される。助詞ヲを伴う名詞句は、過去テンス

を有する形式と共起しやすいという傾向からも、この解釈が支持されるものだと考えられる。

6. 今後の課題

最後に、本稿では議論しきれなかった課題について述べたい。

まず、本稿は書き言葉コーパスでの数量的な調査を基に、感謝表現「ありがとう」の感謝対象を表す名詞句の助詞ヲの有無について論じた。通時的な側面も含めて考察するという方法上の制限から、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を使用した。本稿でこのコーパスを用いて考察を行ったことは妥当であったと考えているが、「ありがとう」のような定型表現はやはり話し言葉において活発に使用されるものである点は認めざるを得ない。本稿も書き言葉のみに注目していたわけではなく、作例を用いて検討するときには話し言葉的領域も含めたものとなるよう意を用いたが、より確実な結論に至るためには話し言葉コーパス等を用いた定量的な側面からの研究も必要である。本稿で見た現象や傾向が書き言葉特有なものか否かは、話し言葉研究からの調査によって明らかになるだろう。したがって、この研究は書き言葉・話し言葉の両面から考察されるべきである。

さらに、より原理的な面について残された問題も非常に興味深い。本稿では感謝表現「ありがとう」の助詞ヲ附加形式と無助詞形式について考察してきたが、このうち現象としてより興味深いのは助詞ヲが附加するという現象であろう。定型表現である「ありがとう」がヲ格名詞句を伴い、あるいは過去テンス形式と共起しやすいといったような動詞的な性質を持つように変化してきていると解釈されうるからである。このような「動詞化」がどの程度まで一般化できるのかについても議論すべきである。例えば、「すみません」や「ごちそうさま」といった他の定型表現にも本稿の考え方が適用できるのかということや、その統語的關係が生成文法の立場からどのように解釈され、記述されうるのかという問題が、今後さらに追及されるべき課題として残されているのである。

使用コーパス

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ-NT)

参考文献

- 井原浩子 (2000) 「日本語の無助詞に関する一考察—：認知言語学の立場から」『東京造形大学研究報』3, pp.105-111.
- 尾上圭介 (1987) 「主語にハもガも使えない文について」国語学会昭和 62 年春季大会発表資料.
- 加藤重広 (1997) 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27, pp.19-82.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 刈宿紀子 (2014) 『無助詞』研究の現状と課題』『学術研究 人文科学・社会科学編』62, pp.147-162.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 黒崎佐仁子 (2003) 「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2, pp.77-93.
- 後藤いく子 (1996) 「挨拶表現に見る日英後比較 (上)」『東海女子短期大学紀要』22, pp.93-108.
- 丹羽哲也 (1989) 「無助詞格の機能—主格と格と語順—」『国語国文』58(10), pp.38-57.
- 長谷川ユリ (1993) 「話し言葉における『無助詞』の機能」『日本語教育』80, pp.158-168.
- Fujii, Noriko & Ono, Tsuyoshi (2000) "The occurrence and Non-occurrence of the Japanese Direct Object Marker *O* in Conversation" *Studies in Language* 24:1, pp.1-39.

付 記

本稿は、2016年11月19日・20日に香港公開大学で開催された第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウムにおける口頭発表を基に加筆・修正したものである。発表時、また発表に前後して多くの方から貴重な意見を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

また、本稿は2016年度大阪大学日本語日本文化教育センター特別研究費Ⅱによる研究成果の一部である。

注

- 1) 本稿で述べる「感謝対象」とは「感謝を伝える相手」ではなく、「感謝を感じる理由」のことを指す。
- 2) 本稿では、助詞ヲを伴わないものをゼロ記号（Ø）で示す。これは助詞ヲが現れた場合と比較して提示するためであり、ゼロ記号（Ø）が助詞の省略を表すわけではないことに留意されたい。
- 3) 感謝表現「ありがとう」は小説の中でも会話部分に現れることが多いが、この例文は小説の中の手紙文から取り上げた。手紙やメールも、書き手がある特定の読み手を想定しているという点から、読み手を限定していない書き言葉に比べると話し言葉であると言える。しかし、本稿で取り上げる「N {ヲ/Ø} ありがとう」は手紙やメールでよく見られる表現のため、本稿では書き言葉における口語性については考慮せず、口語的な文体であっても『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に収録されているものはすべて書き言葉として扱う。
- 4) このことは黒崎 (2003) において指摘されている。
- 5) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』では表記が異なっても同じ語であるものを「語彙素」という見出し語でまとめており、語彙素「有難う」で検索した場合も同様の結果が得られる。
- 6) 「3語」という前方共起条件の設定が妥当か否かについては議論の余地が残るであろう。しかし、検索範囲を広く設定すると、それだけ検索にかかる対象外のデータが膨大になってしまうため、本稿では「3語」が妥当な数字だと判断した。
- 7) 「ありがとう」に前接する助詞は本稿で扱う助詞ヲと無助詞だけでなく、助詞ハや助詞モなども見られる。しかし、本稿では無助詞と助詞ヲを比較することを目的とするため、以下のような用例は調査対象から除いた。
 - (i) a. 先日ハありがとうございます。
 - b. 今年モありがとうございます。
- 8) 時間や状況を表す表現は、無助詞形式でも助詞ヲ附加形式でも用いられる。
 - (ii) お忙しい中 {ヲ/Ø} ありがとうございます。
 しかし、本稿では感謝対象を表す名詞句を調査対象としている。状況を表す語句は感謝対象とは言い難いため、本稿では調査対象から除いた。
- 9) 本稿では感謝対象をどのような文構造で表すのかについて論じているため、感謝の度合いを示す副詞的な要素を伴う「{どうも/本当に/心から} ありがとう」や時間句・状況句を伴う「今日はありがとう」は、「単体使用」に分類した。
- 10) 表1の分類は手作業によるものである。そのため、分類が恣意的に感じられるかもしれない。しかし、手作業による分類の妥当性を示す予備調査として、以下の検索方法で文頭や文頭に近い位置で「ありがとう」が使用されている用例数を調査した結果、

合計 3558 件であった。

(iii) a. 文頭から「アリガトウ」 = 1423 件

b. 文頭から「ドウ」 + 文頭から 2 語「モ」 + 「アリガトウ」 = 188 件

c. 文頭から「ホントウ」 + 文頭から 2 語「ニ」 + 「アリガトウ」 = 147 件

d. 感動詞 + 「アリガトウ」 = 20 件

e. 補助記号 + 「アリガトウ」 = 2903 件 (うち、読点 1123 件を除く)

(iii) の検索結果以外にも、(iv) のように他の副詞的要素や呼びかけが前接している単体使用の用例や、埋め込み節の中で単体使用されている用例が多く、これらを正確に調査するための検索条件の設定が困難であるため、手作業での分類のほうがより精密な数字を調査できると考えた。

(iv) a. {いつも／心から} ありがとうございます。(上記以外の副詞的要素)

b. 手伝ってくれた皆様、ありがとう。(呼びかけ)

c. 両親にありがとうって言いたかった。(埋め込み節)

- 11) 本稿ではテンスの有無に着目しているため、終助詞を伴う「ありがとうね」「ありがとうよ」などの用例は「ありがとう。」に含んだ。また、「その他」の中には、「ありがとう存じます」「ありがとうございます」「ありがとうございました」等の形式が見られたが、いずれもごく少数の用例数であるため、まとめて分析した。

The Occurrence and Non-Occurrence of the Particle “wo” in Japanese Gratitude Expressions:

Synchronic and Diachronic Analysis of a Written Japanese Corpus

Manami FUJIHIRA

This paper discusses the differences between “NP wo arigatou” and “NP Ø arigatou” in Japanese, both of which express “Thank you for NP;” although these two expressions are sometimes not equivalent semantically and grammatically. It has been pointed out that noun phrases may occur without any postpositional particles in colloquial Japanese. In previous studies, there are two different interpretations for the phenomenon of non-occurrence of particles. One is “particle drop or ellipsis,” while the other is “zero-particle.” The aim of this paper is to examine whether the non-occurrence of the particle “wo” in “arigatou” sentences should be regarded as “particle drop” or “zero-particle,” based on a synchronic and diachronic analysis of the quantitative data collected from the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese. This study shows that the non-occurrence of the particle “wo” in Japanese “arigatou” sentences should be regarded as a zero-particle expressing “topic,” and concludes that particles “wo” in “arigatou” sentences are caused by re-interpretation from zero-particles to case-relations. In addition, corpus research shows that NPs with the particle “wo” in “arigatou” sentences have the tendency to connect with past tense form “-gozaimashita.” This fact also supports the concept of “verbification” of Japanese gratitude expression “arigatou.”